

「あかぎ」だからできる
本物の体験



令和7年度 国立赤城青少年交流の家教育事業

令和7年度 教育事業
『あかぎ無限大キャンプ — ファイナル —』
事業報告書

AKAGI MUGENDAI CAMP

あかぎ **無限大** キャンプ
— ファイナル —

令和8年2月

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立赤城青少年交流の家

〒371-0101 群馬県前橋市富士見町赤城山 27
TEL : 027-289-7224
Email : akagi-kikaku@niye.go.jp
URL : <https://akagi.niye.go.jp>

独立行政法人 国立青少年教育振興機構
 国立赤城青少年交流の家

はじめに

「あかぎ無限大キャンプファイナラー」は、平成30年度から開始した長期キャンプ「限界突破キャンプ」に端を発しています。限界突破キャンプは上毛三山（赤城山・妙義山・榛名山）の全てを登頂する移動型のキャンプで、達成感や自己肯定感の醸成を目的としていました。令和4年度からはそれまでの成果を踏まえ自主性の向上に主眼を置き「あかぎ無限大キャンプ」として実施してまいりました。事業担当者である大人が企画したプログラムをこなすだけでなく、参加者自身が自分たちで決定し合意形成できる場面を作りました。具体的にはランダムに用意された野外炊事の食材からメニューを決定したり、赤城山12座のうち登頂する山を自分たちで決定するなど、参加者自身がキャンプを作り上げていくようプログラムを進めました。安全管理上、登頂する山が当日まで決まらないことは、事前の実地踏査などクリアするべき課題が多いですが、参加した子供たちが成長したように、事業担当者も大いに成長したキャンプでした。

この間、文部科学省の「体験活動を通じた青少年自立支援プロジェクト」に採択され、また、令和3年度には公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団のトム・ソーヤースクール企画コンテストにおいて、一般部門の最優秀賞である「安藤百福賞」を受賞いたしました。さらに野外活動における眼への影響調査として、慶応義塾大学医学部、（株）坪田ラボ、近視予防フォーラムと共同研究を実施してきたことも本事業の特徴となっています。

多くの方々に支えられてきた「限界突破キャンプ・あかぎ無限大キャンプ」はコロナ禍には中止を余儀なくされましたが、7回実施してまいりました。キャンプにおけるステージ制の導入やねらいに合わせた事業運営など、先駆的・先導的なプログラムとなるよう実施してきました。これまでの取り組みが、青少年の体験活動の一助になれば幸いです。誰一人取り残すことなく、そして社会に主体的に関わっていく人々を応援してまいります。

国立赤城青少年交流の家 所長 桑山 宗大

目次

はじめに

1. これまでの「あかぎ無限大キャンプ」

(1) 令和4年度（1年目）	01
(2) 令和5年度（2年目）	02
(3) 令和6年度（3年目）	03

2. 事業概要

(1) 事業の趣旨	(2) 目指す子供像	04
(3) 手立て	(4) 事業概要	05

3. 事業内容

(1) 日程	06
(2) プログラムデザイン	07
(3) 各キャンプの内容	
・ボランティア研修	08
・本キャンプ	09
(4) 安全対策	10

4. 調査結果

(1) 実際の活動場面からみる参加者の変容	11~14
(2) 当所実施のふりかえりシートからみる参加者の変容	15・16
(3) 慶應義塾大学医学部・国立赤城青少年交流の家・株式会社坪田ラボ・近視予防フォーラムとの共同研究	17・18

5. 成果と課題

(1) 成果	(2) 課題	19
(3) 慶應義塾大学医学部眼科教室 小川護特任助教より		20

6. 無限大キャンプ4年間の取組について

	21・22
--	-------

7. これまでの取組とその成果

	23・24
--	-------

1 これまでの「あかぎ無限大キャンプ」

(1) 令和4年度(1年目)

1. 趣旨

- ① 7泊8日の長期自然体験活動において、協働的な体験プログラム(野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等)を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。
- ② 7泊8日の長期自然体験活動の集中的な屋外活動(外遊び)を通して、近視進行の抑制(健康の保持増進)を図る。

2. 事業の日程・参加者(小学校5、6年生 計24名)

● 7月9日～7月10日 事前キャンプ		● 8月6日～8月13日 本キャンプ		● 9月17日～9月18日 事後キャンプ														
ステージ	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所	
ファースト	1日 7/9(土)	受付	事前説明会 ※保護者も参加	8:00 アイスブレイク	8:30 朝のつどい	8:45 朝食	9:00 清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散						交流の家(本館)	
	2日 7/10(日)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
セカンド	1日 8/6(土)	受付	開会式	アイスブレイク	8:30 朝のつどい	8:45 朝食	9:00 清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散							交流の家(本館)
	2日 8/7(日)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
	3日 8/8(月)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
	4日 8/9(火)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
サード	5日 8/10(水)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
	6日 8/11(木)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
フォース	7日 8/12(金)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
	8日 8/13(土)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
※本キャンプについては、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、8月6日(土)～8月11日(木)に日程を短縮した。																		

3. 成果と課題

成果

満足: 22人(100%) やや満足: 0人(0%)
 やや不満: 0人(0%) 不満: 0人(0%) (※2名未実地)

1. 参加者アンケート・保護者アンケートや参加者実態から見る成果

- ① 参加者アンケートで、「自分たちで考えて決める活動が楽しかった。」「グループのレクリエーションが楽しかった。」等の感想が見られたことから、グループで考え話し合う活動が、参加者の挑戦意欲の向上やグループへの所属感につながったと考える。
- ② 本キャンプの1か月後の保護者アンケートで、「家の手伝いを自分からするようになった。」という感想から、本キャンプのプログラムが参加者の自発的な行動につながるきっかけの一助になったと考える。

2. 本キャンプの趣旨に対する成果

- ① ステージを『基礎的知識や技能の獲得→活用』と設定したことで、グループ内で手助けが必要な場面に友達を支え、協力して活動する姿が見られた。
- ② 「サード」ステージで実施したグループキャンプタイムでは、活動内容や野外炊事のメニューを決める際に、意欲的に話し合いに参加し、グループの友達と合意形成を図りながらお互いが納得のいく形へと導く姿が見られた。

課題

1. プログラムについて

- ① レクリエーションの内容検討や野外炊事で作る料理の手順や役割分担をチームミーティングで話し合うことで、グループの話し合いが参加者にとってより「必要感」があるものにする。
- ② 参加者がキャンプを通し、自身の成長や変容がわかるようなプログラムや掲示の開発をすることも必要だと考えられる。ベースとなる研修室にふりかえりカードは掲示したが、参加者が一目で成長を把握できるような掲示の方法とふりかえりカードの工夫が必要だと考える。
- ③ 「多様性を認め合える意識の醸成」という本キャンプの趣旨から、多様性を認め合うといったことにつながるプログラムとその効果を事前に検討し、精選しながら取り入れていくことが必要となる。

2. 参加者の安全確保・健康維持について

- ① 日中の活動時における、熱中症対策に重点を置いた休憩の取り方についてボランティアと十分に確認しながら対応していく必要がある。
- ② 感染症予防も考えながら、屋外での活動時は人と十分な距離が取れる場合はマスクを外すよう推奨していく。

(2) 令和5年度(2年目)

1. 趣旨

- ① 協働的な体験プログラム(野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等)を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。
- ② 長期自然体験活動を通して、近視進行の抑制(健康の保持増進)を図る。

2. 事業の日程・参加者(小学校5、6年生 計24名)

● 7月8日～7月9日 事前キャンプ		● 8月13日～8月20日 本キャンプ		● 9月16日～9月17日 事後キャンプ														
ステージ	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所	
ファースト	1日 7/8(土)	受付	事前説明会 ※保護者も参加	8:00 アイスブレイク	8:30 朝のつどい	8:45 朝食	9:00 清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散							交流の家(本館)
	2日 7/9(日)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
セカンド	1日 8/13(土)	受付	開会式	アイスブレイク	8:30 朝のつどい	8:45 朝食	9:00 清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散							交流の家(本館)
	2日 8/14(日)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
	3日 8/15(月)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
	4日 8/16(火)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
サード	5日 8/17(水)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
	6日 8/18(木)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
フォース	7日 8/19(金)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
	8日 8/20(土)	起床	荷物整理	朝のつどい	朝食	清掃	9:15 赤城山登山 (観音堂～鳥居～長七郎山～小沢)	9:45 昼食 (小沢・弁当)	10:00 ふりかえり アンケート記入	10:15 解散								交流の家(本館)
※本キャンプについては、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、8月13日(土)～8月17日(木)に日程を短縮した。																		

3. 成果と課題

成果

満足: 21人(88%) やや満足: 3人(12%)
 やや不満: 0人(0%) 不満: 0人(0%)

1. 参加者アンケート・保護者アンケートや参加者実態から見る成果

- ① 参加者アンケートで、「グループで分かり合えるまで話し合うことができた。」「協力する活動で友情を感じることができた。」等の感想から、グループでの話し合いやグループタイムを設定したことで、多様な考えにふれ、互いに認め合うことにつながったと考える。
- ② 本キャンプの1か月後の保護者アンケートより、「進んで家事に取り組むようになった。」「学校生活で自ら立候補する姿が見られた。」等の感想が見られた。本事業の経験が参加者の主体的・自発的な行動につながったと考える。

2. 本キャンプの趣旨に対する成果

- ① ステージごとのねらいに迫るプログラム編成を行ったことで、参加者がねらいを意識しながらプログラムに参加することができた。
- ② 事前にボランティア研修キャンプを実施し、「ふりかえりの仕方」についての共通理解をもってキャンプに臨んだことにより、ボランティアが中心となって関わる「毎日のふりかえり」がより充実したものとなった。

課題

1. プログラムについて

- ① グループでの話し合いがより意味のあるものとするため、レクリエーションの内容検討や野外炊事で作る料理の手順、役割分担などをチームミーティングで話し合うなど、課題解決的なプログラムの設定が必要となる。
- ② 事後キャンプを行う上で、事前キャンプと事後キャンプに同一のプログラムを取り入れるなど、参加者自身が成長を感じられるプログラムを工夫し、事後キャンプの趣旨に迫るような活動内容や場の設定が必要である。
- ③ 「多様性を認め合える意識の醸成」という本キャンプの趣旨から、多様性を認め合うといったことにつながるプログラムとその効果をより一層検討し、精選しながら取り入れていくことが必要となる。

2. 参加者の安全確保・健康維持について

- ① 日中の活動時における、熱中症対策に重点を置いた休憩の取り方について職員、ボランティアともに十分に確認しながら対応していく必要がある。そのためには、空調のきいた部屋を確保し、休憩時間を意識して設けるなどが必要になる。
- ② 夜間における屋外のテント泊中の熱中症対策として、テント設置する時間や就寝時間の配慮と熱中症対策のグッズなどの用意をする必要がある。

2 事業概要

(3) 令和6年度(3年目)

1. 趣旨

- ①協働的な体験プログラム(野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等)を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。
- ②長期自然体験活動を通して、健康の保持増進(近視の進行の抑制)を図る。

2. 事業の日程・参加者(小学校5、6年生 計23名)

●7月6日(土)～7月7日(日) ボランティア研修(事業に参加するボランティアを対象に研修を行った。)

1日目 7/6(土)	6:00 受付	7:00 開校式	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)
2日目 7/7(日)	6:00 起床	7:00 清掃	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)

●7月13日(土)～7月14日(日) 事前キャンプ 協働的な体験プログラム(■=グループプログラム、■=個人プログラム、■=共同研究)

1日目 7/13(土)	6:00 受付	7:00 開校式	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)
2日目 7/14(日)	6:00 起床	7:00 清掃	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)

●8月11日(日)～8月18日(日) 本キャンプ

1日目 8/11(日)	6:00 受付	7:00 開校式	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)
2日目 8/12(月)	6:00 起床	7:00 清掃	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)
3日目 8/13(火)	6:00 起床	7:00 清掃	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)
4日目 8/14(水)	6:00 起床	7:00 清掃	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)
5日目 8/15(木)	6:00 起床	7:00 清掃	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)
6日目 8/16(金)	6:00 起床	7:00 清掃	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)
7日目 8/17(土)	6:00 起床	7:00 清掃	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)
8日目 8/18(日)	6:00 起床	7:00 清掃	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)

●9月14日(土)～9月15日(日) 事後キャンプ

1日目 9/14(土)	6:00 受付	7:00 開校式	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)
2日目 9/15(日)	6:00 起床	7:00 清掃	8:00 研修(赤城山登山)	9:00 研修(野外炊事)	10:00 研修(レクリエーション)	11:00 昼食	12:00 研修(野外炊事)	13:00 研修(レクリエーション)	14:00 研修(野外炊事)	15:00 研修(レクリエーション)	16:00 研修(野外炊事)	17:00 研修(レクリエーション)	18:00 研修(野外炊事)	19:00 研修(レクリエーション)	20:00 研修(野外炊事)	21:00 交流の家(本館)

3. 成果と課題

成果

満足: 18人(81.8%) やや満足: 4人(18.2%)
 やや不満: 0人(0%) 不満: 0人(0%) ※1名未実施

1. 参加者アンケート・保護者アンケートや参加者実態から見る成果

- ①参加者アンケートで、「みんなで相談して、楽しくレクリエーションの内容を決めることができた。」「みんなで協力してやり遂げることで達成感を味わうことができた。」等の感想から、グループでの話し合いに課題解決的な課題を設定したことで、グループ内での多様な考えにふれ、互いに認め合うことにつながった。
- ②本キャンプの1カ月後の保護者アンケートより、「やるべきことに対して自分から取り組めるようになった。」「手伝いを頼まなくてもできるようになった。」「日々の生活にメリハリをつけることができるようになった。」等の記載が見られた。本事業の経験が参加者の主体性の向上や生活習慣の改善につながったと考える。

2. 本キャンプの趣旨に対する成果

- ①ステージごとのねらいを明確に設定することで、スタッフ・参加者共にねらいを意識しながらプログラムに取り組むことができた。
- ②ボランティア研修を事前に実施し、活動の内容だけではなく、「ふりかえりの仕方」についての共通理解を図り、キャンプに臨んだことにより、ふりかえりの時間が充実したものとなった。

課題

1. プログラムについて

- ①グループでの話し合いをより充実したものとするため、レクリエーションや野外炊事を中心に、自分たちで話し合い、決定していく課題解決的なプログラムの設定が必要である。
- ②キャンプを通して、同一のプログラムを取り入れながら内容を工夫したり、難易度を上げたりして、参加者自身が成長を感じられるプログラムの設定が必要である。
- ③「多様性を認め合える意識の醸成」という本キャンプの趣旨から、多様性を認め合うといったことにつながるプログラムとその効果をより一層検討し、精選しながら取り入れていくことが必要となる。

2. 参加者の安全確保・健康維持について

- ①活動時における、熱中症対策について職員、ボランティアともに十分に確認しながら対応していく必要がある。日中はもちろんのこと、一日を通して、水分補給の声掛け、塩分チャージタブレットの配布、空調のきいた部屋の確保等、常に参加者の体調に配慮しプログラム運営を行っていく必要がある。
- ②活動前・後にかかわらず、手洗い、うがいを習慣化させ、感染症や食中毒について未然に防ぐことができるよう、スタッフ・参加者共に共通行動として取り組んでいく必要がある。

(1) 事業の趣旨

- ①協働的な体験プログラム(野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等)を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。
- ②長期自然体験活動を通して、健康の保持増進(近視進行の抑制)を図る。

(2) 目指す子供像

目指す未来社会像 Society5.0
 持続可能性と強靱性を備え、国民の安全と安心を確保するとともに、
一人ひとりが多様な幸せ(well-being)を実現できる社会

○実現に向けた3本の政策の柱

- ・国民の安全と安心を確保する持続可能で強靱な社会への変革
- ・知のフロンティアを開拓し価値の創造の源泉となる研究力の強化
- ・一人一人の多様な幸せと課題への挑戦を実現する教育・人材の育成

「多様性」「公正や個人の尊厳」「多様な幸せ(well-being)」の価値がSociety5.0の中核であること

※「第6期科学技術・イノベーション基本計画」(2021 内閣府総合科学技術・イノベーション会議)

自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。

※「小学校学習指導要領(平成29年告示)前文」

目指す子供像

- ・自分の意見を発言でき、他者の意見を傾聴できる子供
- ・自分のよいところ(長所)と他者のよいところ(長所)に気付ける子供
- ・合意形成をしながら、対話・行動ができる子供

○協働的な自然体験活動プログラム
 (赤城山登山・野外炊事・AAP・オリエンテーリング・レクリエーション等)

①ゆとりのあるプログラム

- ・他者の特徴を知るための時間
- ・活動プログラムを習得する時間
- ・活動前の話し合いの時間
- ・自分の考えをまとめる時間
- ・一日のふりかえりの時間

②自分たちで決めるプログラム

- ・グループでの話し合い

(AAP・オリエンテーリング・野外炊事)

○与件

- ・国立赤城青少年交流の家・前橋赤城少年自然の家エリアでの7泊8日
- ・事前研修をつんだ法人ボランティアの参加
- ・「無限大キャンプ」(令和4年度～6年度)で、仲間と長期間過ごし、協働的な活動を通して、思い通りにならないことや我慢する経験から「忍耐力」向上に高い教育的効果があることが示唆された。
- ・協働的な自然体験活動プログラムを通して話し合いを行うことは、多様性を認め合いながら、対話や行動をしようとする意識の醸成に効果的であることが示唆された。

○現代的な課題

- ・インターネット等を通じた**擬似的・間接的な体験が増加**。
- ・人やもの、**自然に直接触れるという体験活動の機会が減少**。

○一般的な小学校高学年の発達の特徴

- ・自分のことを**客観的にとらえることができる**ようになる。
- ・個人差が大きく自己に対する肯定的な意識を持って、**劣等感を持ちやすくなる**。
- ・集団の規則を理解して、**集団活動に主体的に関与する**。
- ・遊びなどでは自分たちで決まりを作り、**ルールを守るようになる**。

長期自然体験活動を通して



(3) 手立て

- ①全行程を「ファースト」【出会い】、「セカンド」【獲得】、「サード」【挑戦・成長】、「ファイナル」【旅立ち】の4つのステージに分け、参加者がステージ毎のねらいを理解し、体験したことが次の学びに活かされるようなプログラム構成をする。
- ②「他者を知るための時間」「活動プログラムを習得する時間」「活動前の話合いの時間」「自分の考えをまとめる時間」「1日のふりかえりの時間」(個人・グループ)を十分に確保するために、ゆとりのあるプログラム編成をする。
- ③野外炊事におけるスタッフの関わり方を、安全に関する介入を除いて最小限にし、役割分担、調理、食材選び等、個人・グループの自己決定を尊重し、参加者の主体性や自主性が高まるようにしていく。
- ④赤城山登山では、全員が登頂するために必要な事について話し合い、力を合わせて活動できるようにする。
- ⑤グループ間の協議が活発になるように、活動に必要な感がある課題を設定し、グループの話し合いで決める活動(グループタイム)を継続して行う。

(4) 事業概要

- ①期日
 - 【ボランティア研修】 令和7年7月 5日(土)～7月 6日(日) (1泊2日)
 - 【本キャンプ】 令和7年8月10日(日)～8月17日(日) (7泊8日)
- ②参加者
 - 【対象】 小学5年生～小学校6年生 20名(男子14名、女子6名)
 - 【人数】 小学5年生男子：6名 小学6年生男子：8名
小学5年生女子：2名 小学6年生女子：4名
群馬県：14名 埼玉県：4名 神奈川県：1名 茨城県：1名
 - 【班編成】 1グループ6～7名で3グループに編成
- ③スタッフ
 - ・国立赤城青少年交流の家職員：3名
 - ・ボランティアスタッフ：3名



(1) 日程

●7月5日(土)～7月6日(日) ボランティア研修 (事業に参加するボランティアを対象に研修を行った。)

時間	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所
1日目 7/5(土)				受付	講義「ボランティアの意義・安全管理」「事業概要説明」「所の生活」等	昼食(弁当持参)	研修支援体験	施設見学	野外炊事研修【ハエリア】準備の仕方、調理の仕方、薪の組み方、片付けの仕方	フリータイム	ふりかえりの仕方 チームMTの仕方	入浴	就寝				国立赤城青少年交流の家
2日目 7/6(日)	起床	荷物整理	朝食	退所点検	赤城山登山研修 (前橋市赤城少年自然の家前登山口→地藏岳→八丁峠→小沼→小地藏岳→鳥居峠→おのご駐車場→大沼→前橋市赤城少年自然の家)		帰所後	解散									



●8月10日(土)～8月17日(日) 事前キャンプ (■=グループプログラム、■=個人プログラム、■=共同研究)

ステージ	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所
ファースト (出会い)				受付	開会式	自己紹介 アイスブレイク 保護者面談	Oチームミーティングの仕方 OチームMT 各自自分の考えを共有 チームワークを行う	荷物整理 荷物持ち 移動	夕食(食堂)	入浴	チームMT チームとしてのふりかえり MTの振り返り 明日の活動確認	ふりかえり	就寝				国立赤城青少年交流の家
セカンド (獲得)	起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	あかぎアドベンチャープログラム	昼食(食堂)	レクリエーション (クイズ、ディスコゲーム)	夜の検査	野外炊事【カレー作り】 準備の仕方、調理の仕方、 薪の組み方、片付けの仕方	入浴	OチームMT チームとしてのふりかえり MTの振り返り 明日の活動確認	ふりかえり	就寝				前橋市赤城少年自然の家	
サード (挑戦・成長)	起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	オリエンテーリング	昼食(食堂)	移動	前橋市赤城少年自然の家	カッター	夕食(食堂)	入浴	OチームMT チームとしてのふりかえり MTの振り返り 明日の活動確認	ふりかえり	就寝			前橋市赤城少年自然の家	
ファイナル (旅立ち)	起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	赤城山登山 (前橋市赤城少年自然の家前登山口→地藏岳→八丁峠→小沼→小地藏岳→鳥居峠→おのご駐車場→大沼→前橋市赤城少年自然の家)	自由時間	夕食(食堂)	入浴	OチームMT チームとしてのふりかえり MTの振り返り 明日の活動確認 キャンプのまとめ、発表の仕方	ふりかえり	就寝						国立赤城青少年交流の家	
	起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	退所点検	クラフト (メッセージボード作り)	昼食(食堂)	移動	国立赤城少年自然の家	野外炊事【ハエリア】	入浴	OチームMT チームとしてのふりかえり MTの振り返り 明日の活動確認 キャンプのまとめ、発表の仕方	ふりかえり	就寝			国立赤城青少年交流の家	
	起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	赤城山登山 (おのご駐車場→黒槍山登山口→黒槍山→駒ヶ岳→駒ヶ岳登山口→おのご駐車場)	自由時間	夕食(食堂)	入浴	OチームMT チームとしてのふりかえり MTの振り返り 明日の活動確認 キャンプのまとめ、発表の仕方	ふりかえり	就寝						国立赤城青少年交流の家	
	起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	OチームMT お別れパーティーの内容を考えよう キャンプのまとめ、発表準備	昼食(食堂)	OチームMT お別れ会準備 キャンプのまとめ、発表準備	夜の検査	お別れパーティー (ピクニック野外炊事、レク等)	入浴	チームMT ふりかえり	就寝					国立赤城青少年交流の家	
	起床	健康観察 荷物整理	朝食(食堂)	ふりかえり アンケート記入	閉会式 解散												



2. 事業概要
3. 事業内容

(2) プログラムデザイン

各ステージのねらいと活動のポイント、スタッフの関わり方

日程	ステージ	ステージのねらい	活動のポイント	スタッフの関わり方
キャンプ1日目 8月10日(日)	【ファースト】 出会い	・キャンプのルールやマナーを知るとともに、基本的な生活習慣を身に付け見直しをもつ。 ・新しい仲間とともに協力して取り組んでいこうとする意欲をもつ。	・全体での約束事や活動時のマナーを確認し、一人一人が安心してキャンプを進めることができるような雰囲気作りをする。 ・初めて出会う仲間とかかわりを持ちながら様々な活動に進んで取り組むようにする。 ・個人・グループとしてのふりかえりの仕方を知り、次の日の活動に活かすことができるようにする。	・子供たちの緊張をほぐすために笑顔で明るく積極的に関わり、受容的な態度で接する。 ・所の生活時間、挨拶、正しい言葉遣い、整理整頓等について指導し、意識付けを行う。 ・個人の特徴（性格や人とかかわり方）をつかみ、キャンプを通しての関わり方に活かしていく。 ・他者の考えを受け入れたり尊重したりすることができるように意図的に介入する。
キャンプ2日目 8月11日(月)	【セカンド】 獲得	・グループメンバーの個性を知るとともに、野外炊事キャンプに必要な基礎知識や技能を身に付け、合意形成を図りながら仲間と協働することができる。	・キャンプ生活に必要な基礎知識や技術が身に付けられるようにする。 ・一日の流れを理解し、先を見通して行動できるようにする。 ・仲間を助けたり、助けられたりすることで、仲間の良さに気づく。 ・グループでの話し合いや合意形成の場面では、お互いの考えを尊重したり、前向きに捉えたりすることができるようにする。 ・個人・グループとしてのふりかえりをし、次の日の活動に活かすことができるようにする。グループでのふりかえりについては、自分たちで進められるようにする。	・キャンプ生活に必要な基礎知識や技術をわかりやすく丁寧に伝え、怪我のないようにサポートをする。 ・活動や話し合いにおいて子どもたちの自主性を大切にし、徐々に介入の割合を減らしていく。ただし、安全上必要な介入については積極的にやっていく。 ・子供たちの挑戦を積極的に励まし、認め、一人一人の意欲を高める。 ・生活や人間関係の慣れにより、想定される意見の衝突やトラブルについて、それを子供たちが主体的に捉え、解決できるように必要以上の介入はしない。 ・子供たちの特徴や人間関係についての実態把握をより積極的に行い、情報についてはスタッフ間で共有していく。
キャンプ3日目 8月12日(火)				
キャンプ4日目 8月13日(水)				
キャンプ5日目 8月14日(木)	【サード】 挑戦・成長	・キャンプの中でできるようになったこと、意識したことを整理し、言葉でまとめることで自身の成長を実感する。	・身に付けた力を活かし、仲間と協力してより困難な課題に挑戦する。 ・グループ内での自分の役割を理解し、進んで役割を果たすようにする。 ・助けが必要な場面で適切に仲間と支え合い、互いに協力して活動に取り組むようにする。 ・個人・グループとしてのふりかえりを自分たちで行い、それを次の活動に活かすことができるようにする。	・キャンプスタート時の自分の姿を想起させ、成長したことや頑張れたことに対する自信を持たせる。 ・他者の良さや頑張りにも目を向けられるようにし、一人一人が他者から認められる経験をするようにする。 ・子供の体力的な様子に目を配り体調の変化の把握に努める。 ・活動やふりかえりについて、極力介入せず、子供たちの自主性を大切にし、発言や考えを大切にすること。 ・キャンプ後半に入り、より参加者の人間関係や一人一人の様子等の把握に努め、スタッフ間で共有していく。
キャンプ6日目 8月15日(金)				
キャンプ7日目 8月16日(土)	【ファイナル】 旅立ち	・全日程をやり遂げたという達成感を味わい、これまでの自分と今の自分の変容や成長を見つめ、今後の自分について考える。	・チームの仲間と過ごした日々をふりかえり、自分の意見をもち発言すること、他者の意見を傾聴することの大切さを確かめる。 ・最後までやり抜いた自分を見つめ、成長を実感し、これからの生活に活かしていこうという気持ちをもつ。	・ふりかえりシートをもとに、キャンプスタート時の自身の姿やこれまでの活動について改めて想起させ、自身の成長や変容について気付かせるようにする。 ・キャンプを通して経験したことや学んだことを今後の人生にどのように生かしていきたいか、しっかりと考えさせる。 ・これからも、何事にも自信を持って取り組むよう言葉をかける。
キャンプ8日目 8月17日(日)				

(3) 各キャンプの内容

CAMPING ○ボランティア研修

1. 企画運営のポイント

- 「あかぎ無限大キャンプファイナル」に向けて、野外炊事・登山についての基本的な知識や技能を身に付けるとともに、ボランティアとしての役割を理解し、心構えをもてるよう企画した。
- ボランティアが見通しと余裕をもって事前キャンプに臨めるように、当該キャンプの内容に沿った研修内容を企画した。

2. 日程

日程	午前	午後	夜
7月5日(土)	集合 自己紹介・アイスブレイク 説明「事業概要説明」 「登山安全管理」 「所の生活について」	説明「施設見学」 演習「クップ・キンボール」 「オリエンテーリング」	演習「野外炊事」 【パエリア】
7月6日(日)	演習「つどい・退所点検の仕方」 実技「登山」 (前橋市赤城少年自然の家登山口～地蔵岳～八丁峠～小沼～小地蔵岳～鳥居峠～おのご駐車場～大沼～前橋市赤城青少年自然の家)	説明「キャンプ日程確認」	

3. 主な活動内容



研修支援体験

野外炊事（パエリア）

施設見学

登山（地蔵岳）

4. 成果と課題

- 参加者アンケート結果
満足：5人（100%） やや満足：0人（0%） やや不満：0人（0%） 不満：0人（0%）
- 成果
 - 研修を通じて、「初参加で不安だったが、キャンプ全体の様子をイメージすることができるようになった。」等の感想が多いことから、事前研修として有効であったと考えられる。
 - 登山を通し、ボランティアが自身の体力を把握するとともに、ケガや事故が予測される場面や箇所を把握することができた。
- 課題
 - 長期キャンプ初参加のボランティアが多く、子供との関わり方に対して不安を感じている様子も見られ、少しでも解消できるような配慮が必要である。
 - 1泊2日の研修ではすべてを網羅することは難しい。プログラムの危険度やけがのリスク等を考慮し、研修内容をより精選していくことが必要である。

CAMPING ○本キャンプ

1. 企画運営のポイント

- (1) グループでの話し合いが課題解決的な内容になるよう、必要感のある課題を設定し、全日程で継続的に実施した。
- (2) キャンプの日程を4つのステージに分け、参加者がステージ毎のねらいを意識できるようにしな実施した。
- (3) 前橋市赤城少年自然の家と連携することで、幅広い協動的な体験プログラムを実施することができるようにした。

2. 日程 (※12日(火)午後～14日(木)午前まで前橋市赤城少年自然の家で活動)

	ステージ	午前	午後	夜
8月10日(日)	ファースト 【出会い】		・開会式・アイスペイク ・チームミーティング① ・眼の検査	・チームミーティング② ・ふりかえり
8月11日(月)		・チームミーティング③ ・あかぎアドベンチャープログラム ・オリエンテーリング	・キンボール ・眼の検査	・チームミーティング④ ・ふりかえり
8月12日(火)	セカンド 【挑戦】		・クラフト体験 【ランタン作り】	・登山事前指導 ・チームミーティング⑤ ・ふりかえり
8月13日(水)		・赤城山登山 【前橋市赤城少年自然の家前登山口→地藏岳→八丁峠→小沼→小地藏岳→鳥居峠→覚満淵→大沼→前橋市赤城少年自然の家】		・チームミーティング⑥ ・ふりかえり
8月14日(木)	サード 【成長】	・カッター	・チームミーティング⑦ ・野外炊事 【バエリア・豚汁】	・チームミーティング⑧ ・ふりかえり
8月15日(金)		・赤城山登山 【国立赤城青少年交流の家→おのご駐車場→黒檜山→駒ヶ岳→おのご駐車場→国立赤城青少年交流の家】		・チームミーティング⑨ ・ふりかえり
8月16日(土)	ファイナル 【旅立ち】		・チームミーティング⑩ ・眼の検査 ・ビックリ野外炊事	・チームミーティング⑪ ・ふりかえり
8月17日(日)		・ふりかえり ・閉会式・決意表明		

3. 主な活動内容



チームミーティング 赤城山登山 レクリエーション 野外炊事 カッター

4. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足：19人(95%) やや満足：1人(5%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

(2) 成果

- ・参加者アンケートで、「野外炊事で、自分たちで話し合って役割分担や作るものを決めることができ楽しかった。」「自分たちで決めたレクリエーションを行うことができ楽しかった。」等の感想から、グループでの話し合いを多く設定したことで、グループ内での多様な考えにふれ、互いに認め合うことにつながった。
- ・前橋市赤城少年自然の家と連携することで、幅広い協動的な体験プログラムを実施することができ、参加者満足度の高まりにつながった。
- ・ステージごとにねらいを明確にした上でプログラム編成を行ったことで、参加者がねらいを意識しながらプログラムに参加することができた。
- ・キャンプ後の学校生活や家庭生活の変容についての保護者アンケートには、「料理や洗濯のお手伝いをしてくれるようになった。」「運動会の副団長になった。」「困ったことや大変な時に、友達に相談できるようになった。」等の記載が見られた。本事業の経験が参加者の主体的・自発的な行動につながった。

(3) 課題

- ・今キャンプで「あかぎ無限大キャンプ」は最終年を迎え、一区切りとなった。プログラム内容の教育的効果について様々な視点から検証をし、より効果的な事業となるよう企画・運営していく。

(4) 安全対策

① 熱中症対策

- ・ゆとりあるプログラム編成を行い、プログラムの間に休憩時間をとれる日程調整を行った。
- ・参加費で熱中症対策グッズ(塩分チャージタブレット、携帯用保冷剤、経口補水液)を購入し、個人に配布した。屋外での活動時は積極的な活用を促した。
- ・WBGT測定をこまめに行い、「警戒」「厳重警戒」を示しているときは、水分補給・塩分補給や休憩を促すよう声かけを徹底した。
- ・屋外での活動時は、活動場所付近に緊急の避難所として冷房の効いた部屋を1室確保した。
- ・班付きボランティアにも塩分タブレットや経口補水液を常備させ、必要に応じて参加者に配布するよう指示をした。また、グループ毎の活動時は参加者の様子を観察し、十分な休憩をとるよう共通理解を図った上で活動を行った。

② 登山時の安全対策

- ・登山コースを設定するにあたり、候補となった全コースの実地踏査を行い、参加者に適したコースを設定した。
- ・実地踏査では、危険箇所の確認、雨天時の対応、エスケープルートの設定などスタッフで確認し、記録した。
- ・ボランティア研修では、講義で登山の安全管理研修を実施した。また、実際に参加者が登る山で安全確認や実技研修を実施した。
- ・登山実施前に登山ミーティングを行い、参加者とスタッフ全員で活動上の留意点、コースや危険箇所を確認した。
- ・登山時は担当するスタッフ数を増員し、緊急時に迅速な対応が取れるようスタッフ配置を行った。
- ・登山の際には、日本山岳会に所属する研修指導員を招聘し、安全対策を強化した。

③ 感染症対策

- ・新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが5類に移行したが、手洗い、うがい等の基本的な感染症対策は継続して実施した。特に、活動後、食事前については、班付きボランティアに指示をし、参加者に徹底させるようにした。
- ・手指消毒やアルコール除菌シートを常時使えるよう配置し、ボランティアと参加者がこまめに利用するよう推奨した。

④ 緊急対応時フローチャート

- ・緊急対応時フローチャートを作成し、ボランティア研修の際にスタッフ間で共通理解を図るとともに、キャンプの際には、スタッフミーティングの中で確認するようになった。

4 調査結果

(1) 活動場面からみる参加者の変容

※グループ・個人の変容について、活動の姿、チームMT、ふりかえりの様子等をもとにスタッフの視点からまとめた。

① グループの変容

○事前アンケート（キャンプ実施1か月前に全参加者対象に実施。）

「キャンプに対して楽しみなことは何ですか。」という問いに対して、新しい友達をつくること、みんなで様々な体験をすること、自然に触れること、赤城山登山、クラフト体験、カッター体験等の回答が多く見られた。「キャンプに対して不安なことはありますか。」という問いに対して、「友達ができるかどうか。」「登山で登りきることができるか。」等の回答が見られた。一番多かったのが、「特にありません」という回答で、参加者の多くがキャンプに対して不安な気持ちよりも楽しみたいという気持ちが強いことが読み取れる。

○ファーストステージの様子



開会式では、昨年度からの参加者数名以外は、期待や不安など様々な気持ちが入り混じった、大変緊張した様子が見られた。参加者同士で声を掛け合う場面はほとんど見られず、静かに開会式を待つ状態だった。式の最中は終始緊張した様子であったが、その後のアイスブレイクの時間から徐々に打ち解け、笑顔が少しずつ見られるようになった。その後、チームMT①として、グループ内でお互いを知ることを目的として、キャンプ後までに目指す姿や自分で考えたチーム旗のデザインについて紹介し合う活動を行った。初めてということで、まだぎこちなさがあり、特に5年生は上級生の前で遠慮がちな様子が見られた。また、夜にはチームMT②として、グループ・個人でのふりかえりを行った。ここではふりかえりの仕方を知る時間と位置づけ、職員主導で行った。グループでのふりかえりは、活動について感じたこと等を言葉で伝え合い、個人でのふりかえりは、共通のシートを使用し、感じたことや明日の活動に活かしたいこと等について文章で記述をさせた。この段階では、グループ内での関係性はできておらず、役割や立ち位置を模索しているように感じた。キャンプ2日目には、AAP（あかぎアドベンチャープログラム）、レクリエーション（キンボール）、野外炊事（カレー作り）を行った。本格的に活動が始まり、それぞれの個性が見え始め、昨年度からの参加者の6年生を中心にグループの友達と積極的に関わり合いながら活動をする様子が見られるようになった。グループでのふりかえりでは、初日にふりかえりの仕方を理解することで、ボランティアを中心にどのグループもスムーズに行っていた。しかし、自分の意見を伝えることで満足してしまい、友達のふりかえりについても大切に、注意深く耳を傾けようとする雰囲気作りが課題だと感じた。ふりかえりシートには「みんなとたくさん話せた。」「友達のことを知ることができて仲が深まった。」「協力して活動できた。」等の1日目のふりかえりでは見られなかった言葉が多く見られた。

○セカンドステージの様子

3日目は、午前中に館内フォトラリーを行った。グループ内での関係性もできてきた様子で、地図を共有しながら確認し合い、全員でクリアを目指そうとする意識が生まれ始めていた。自分本位で行動してしまう参加者も見られたが、グループ内の6年生を中心に「みんなでしっかりと活動しよう」と声掛けをしてきていたことで、最後までグループでしっかりと活動することができていた。活動後、得点を集計して順位発表を行ったが、最下位グループの参加者一名が泣いてしまうということがあった。その際、泣いてしまった参加者に対してグループ内で頑張りを称賛したり優しい声掛けをしたりして、最終的には結果を受け入れ解決することができた。スタッフが介入することなく、自分たちで解決することができ、グループの結束力が高まってきたことが感じられた。午後からは前橋市赤城少年自然の家に活動拠点を移し、活動を行った。4日目は、地蔵岳登山を行った。初めての登山である参加者が複数名おり、事前アンケートでは「登りきることができるか不安」という記述が見られた。前日のふりかえりの時間に、登山経験のない子や体力に不安がある子がいるということに参加者とスタッフで周知し、協力して全員で登りきるということを目指した。気温が高く、体力差や登山経験の差等によってペースダウンしてしまう場面もあったが、全員が最後まで諦めずに登りきることができた。頂上では、登りきれた達成感で嬉しそうにしている表情や綺麗な景色を目にした驚きの表情、やっと登りきれたという疲労困憊の表情など、参加者そ



れぞれに表情があり印象的だった。登山中、「ここから登りが急になるよ。」「この石は踏まないで歩いて。」「ペースを少しゆっくりにしてほしい。」等、具体的な声掛けをお互いにしながら、全員で登頂を目指そうとすることで一体感がより強くなったと感じた。グループでのふりかえりでは、繰り返し取り組んできたことで、自分の言葉で伝える力が格段に向上し、一日の具体的な活動場面について、どのような気持ちになったか、明日の活動にどう生かしていきたいかについて上手に伝えることができるようになった。この段階から、職員や班付きボラに頼らずとも、自分たちでふりかえりを進められるようになった。また、伝える力の向上と相関し、友達の考えに対しての聞き方も大変上手になり、話している人を見て顔きながら聞くような様子が各グループで見られた。

○サードステージの様子

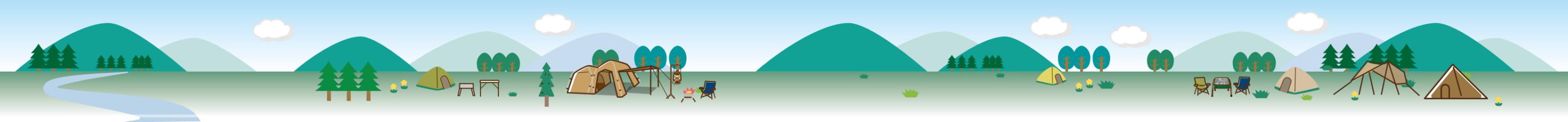


5日目の午前中は、大沼でのカッター体験を行った。事前アンケートで楽しみな活動として記述する参加者が多かった活動である。救命道具やオールの使用方のレクチャーを受け、いよいよ出発となった。初めはまっすぐ前進することも難しく、全体的に息が合わなかったが、その際これまでの活動が生かされていることがわかる様子が見られた。スタッフからレクチャーを受けた漕ぎ方だけではなく、ペアでお互いにオールの持ち方、足の着く位置や座る位置などをアドバイスを自然に行っていた。ある参加者は近くのグループにアドバイスをすることも見られた。その後、徐々にペアのリズムが合っていくと、全体のオールの回転のタイミングも合っていくと、スムーズに進むようになった。途中、沼全体が霧に覆われて視界が悪い場面もあったが、幻想的な雰囲気の中での体験となった。午後から国立赤城へもどり、野外炊事でバエリア・豚汁作りを行った。2回目ということで、ボラや職員が極力介入せずとも自分たちで役割分担をし、レシピをもとにどのグループも完成させることができた。作業中には「何か手伝おうか。」「これ片付けておくれ。」と互いに声をかけ、メンバーと関わり合いながら前向きに活動に取り組む姿が多く見られ、1回目の野外炊事ではあまり見られなかった光景であった。個人のふりかえりでは、「みんなで」「協力」「チームワーク」「声掛け」等のワードがほとんどの参加者の記述に見られ、活動を通して仲間意識や協調性が高まっていることがわかる。6日目は、黒檜山の登山を行った。山の難易度があがることもあり、前日の夜と登山開始前に、事前MTの時間を設けた。注意点等の必要な事はこちらから伝え、残りの多くの時間を「全員で登りきるためにどうしたらよいか」について話し合わせた。並ぶ順番を変えたり、クイズや歌を歌ったりするなど、それぞれのグループが楽しく安全に登りきるための方策を考えていた。また、参加者から、こまめに休憩を入れてほしいことや体力に自信がなく不安なためボラのそばで登りたいなど、与えられた活動に対してただ取り組むという受け身な姿勢ではなく、達成するために必要な事をスタッフ側に要望する能動的な姿勢の子が多くなったと感じた。途中、ペースが遅れてしまう子や足の痛みを訴える子もいたが、それぞれのグループで励まし合い、全員が無事に頂上まで無事に登りきることができた。その日のふりかえりシートには、登りきれたことの達成感や、周りのメンバーへの感謝について全員が記述しており、参加者にとって有意義な活動になったことが窺える。

○ファイナルステージの様子

7日目の午前中は、閉会式で行う決意表明の準備を行った。このキャンプを通して、自分が学んだことやできるようになったこと、またそれを今後の生活にどう役立てていくかについて発表資料の作成を行った。午後からは「お別れパーティ」や夕食には「ビックリ野外炊事」を行った。「お別れパーティ」では、自分たちで考えたレクを行ったり、色紙にメッセージを書いて交換したりした。「ビックリ野外炊事」では、用意された食材を見て、話し合って自分たちで食事のメニューを考えた。複数の意見の折衷案や多数決などグループ毎で決定法は様々で、決定までの時間にも差は出たが、折り合いをつけながら全てのグループが決定をすることができた。一人一人が自分の言葉でしっかりと意見を言うことができ、また、友達の意見にもきちんと耳を傾ける雰囲気ができていた。8日目は、これまでの活動について一人一人が最後のふりかえりを行い、その後、閉会式を行った。ふりかえりでは、7泊8日を通しての自分の成長や変化について伝えあったが、その中で多くの参加者がグループのメンバーへ感謝の気持ちを述べる様子が見られた。自身への達成感と同時に、共に過ごした仲間に対して、かけがえのない存在であるという気持ちが沸き上がっているようであった。閉会式では、用意した原稿をただ読むのではなく、しっかりと顔をあげて堂々とした態度で自分の発表を行うことができた。





②個人の変容

対象児童A（小学生・男子）

○事前アンケート（キャンプ実施1か月前に全参加者対象に実施。）

「キャンプに対して不安なことはありますか。」という問いに対して、「初めて出会う人たちにとけこめるか不安」「仲良く活動に取り組めるか心配」と回答しており、人との関わりに対して不安を強く感じていた。一方で、活動プログラムに対しては「野外炊事やカッターは初めてなので挑戦してみたい」という前向きな回答も見られ、人との関わりに不安を感じつつも、活動に対して積極的に取り組み、成長したいという思いが感じられた。

○ファーストステージの様子

学校行事以外で宿泊を伴う事業に参加したことがないことや参加者の中に知り合いがいないこともあり、特に初日は緊張した様子が多く見られた。アイスブレイクでは楽しそうに取り組んでいたものの、自分から積極的にスタッフや参加者と関わることができず、周りの様子を窺ったり、促されたりしながら活動していた。チームMTでは、初日でチームのメンバーや話し合いの仕方にまだ慣れていないということもあり、他者へ伝えることを意識した内容や話し方は程遠く、手元に視線をやるなどしながら端的に自分の考えや意見を一方的に発言するような様子であった。2日目に入り、AAP（あかぎアドベンチャープログラム）や野外炊事などの協動的な体験プログラムに取り組む中で、児童Bと意気投合したようで、児童Bに対しては自分から話しかけるような場面が少しずつ増えていった。野外炊事のカレー作りでは火おこしを担当し、火の管理を一生懸命行っていた。食べ終わると、洗い物に進んで取り組み、他のグループの洗い残しに気が付き、進んで片付けをしていた。作業に対しては、グループのメンバーと協力して取り組むというよりは、黙々と自分の仕事に取り組む様子であった。ふりかえりシートの中で、「野外炊事では火おこしや洗い物が大変だったけれど、その分、カレーがすごく美味しかった。」という記述があり、自分なりに前向きに取り組み、得られた成果を実感しているようだった。チームMTについては一日目と同様で、チームのメンバーの顔を見て話すというよりは、一方的に短い言葉で話し、時より言葉がつまってしまう場面も見受けられた。自分の発言が終わると集中が切れ、他の参加者の発言に耳を傾ける様子は見られなかった。



○セカンドステージの様子

キャンプ3日目に入り、児童Bとだけではなく、他の参加者とも関わりをもつような場面も少しずつ増えていった。館内フォトラリーでは、グループのみんなについていくだけではなく、地図を見ながらこっちはないかと先導するような場面も見られた。午後からは前橋市赤城少年自然の家で活動拠点を移し、活動を行った。ふりかえりシートの中で、「部屋で過ごす時間に友達と少し騒ぎすぎてしまった。他の人の迷惑になるので明日から気を付けようと思った。」というファーストステージにはなかった他者を意識した記述が見られるようになった。4日目には、地蔵岳の登山を行った。出発前、水筒や上着などを両手に抱え、焦っている様子が見られたため、重さや使用頻度の高い物等を考えどのような順番でリュックにつめたらよいか一緒に確認をして荷物を整理することで、落ち着いて出発を迎えることができた。出発前にみんなで円陣を組んだ際には、やる気に満ちたとても良い顔をしていたのが印象的だった。登山の途中、登るペースや順番について児童Bと初めて口論になった。児童Aは自分の主張を曲げず、しばらく様子を見守ったが解決は難しかったため、スタッフが間に入り自分の主張ばかりではなくお互いの考えを聞き、どうしたら折り合いをつけることができるかを一緒に考えることで解決することができ、無事に頂上までたどり着くことができた。その後の行程も児童Bとトラブルになることはなく、お互いで声をかけながらゴールを目指して頑張る姿が見られた。少し気持ちにも余裕が出たのか、他のメンバーにペースは大丈夫か、足の痛みなどはないかなど声かけをする様子が見られた。その日の個人のふりかえりで、登山を無事に終えたことの達成感や喜びの記述が見られた一方で、休憩時間にボードゲームを行った際に口論になったという記述があった。児童B以外



の参加者との関わりも生まれてきており、良い傾向とを感じる反面、意見が食い違う場面も多く見られるようになってきた。セカンドステージに入り、話し合いの場面で、メンバーの顔を見て自分の考えをしっかりと伝え、人の話にも耳を傾ける様子が見られるようになった。慣れてきたこともあるが、自分なりに伝えることや聞くことに対して他者を意識することができるようになってきたように感じた。

○サードステージの様子

キャンプ5日目は、児童Aが楽しみにしていた「カッターボード体験」を行った。朝からとても楽しみにしている様子で、あいにくの天候であったため、実施できるかどうか何度も確認する姿が見られた。事前の救命道具の使い方やオール漕ぎ方などの説明に熱心に耳を傾け、近くの子に教える姿は、これまでは見られなかった。オールを二人一組で漕ぐにあたり、児童Aのペアが児童Bであった。最初は仲良く声を掛け合いながら息を合わせて漕いでいたが、児童AとBのペアのオールだけが他の参加者と徐々にタイミングが合わなくなり、お互いを責めるような発言が目立つようになった。登山の時の経験を踏まえ、今回はどうしたら解決するか自分たちで話すように促すと、時間は要したが自分たちで話し合い、解決までたどり着くことができた。自分の主張だけではなく、他の考えも尊重することが少しずつできるようになったことは、キャンプ前半には見られない姿だった。その日のふりかえりシートの中で、「カッターはみんなで協力しないと前に進まないし、一人が勝手なことをするとケガをさせてしまうこともあることがわかった。」という記述が見られた。また、キャンプ6日目には黒檜山の登山を行った。前回の登山に比べ標高が高く、暑さも影響し、辛そうな表情も見られたが、弱音をはかずに登りきることができた。登山中には、友達に励ましの声をかける姿が見られた。活動を通して相手を尊重することや思いやることについて自然とできる場面が確実に増えたと感じた。その日のふりかえりシートに「手を使わないと登れないところがあったりして、きつかったけどとても楽しかった。」という記述があり、活動に対して前向きに取り組んだことが読み取れる。チームMTでは、明日のレクや野外炊事の内容について話し合った。話し合う際に、みんなに配慮した意見を述べ、他の参加者が発言している時には、相手の顔を見て、しっかりと聞くことができていた。



○ファイナルステージの様子

キャンプ7日目はお別れパーティとして、自分たちで決めたレクや「ビックリ野外炊事」を行った。特に「ビックリ野外炊事」については、これまでの野外炊事とは違い、たくさんの食材の中から、自分たちでメニューを考えるというものだった。児童Aは、火おこしの担当を進んで引き受け、薪の準備等について他の参加者と声を掛け合いながら取り組んでいた。これまでの経験から、火おこしについて自信をもっているようで、大変効率よく作業を進めていた。グループのメンバーから薪の準備は任せたとわれ、「オッケー！」とはりきって取り組んでいたのが印象的だった。人から頼られること、人の役に立つことの喜びを感じているようであった。準備が終わると調理の手伝いをし、必要なくなった包丁やまな板などを進んで片付けをしていた。野菜たっぷりのパスタ、焼き鳥、フルーツポンチをグループのメンバーと協力して完成させ、美味しいと言いつつ嬉しそうに食べていた。その日のふりかえりシートに「メニューや作り方もないのに、自分たちで食材を選んで、自分たちで作って美味しく食べられたのはすごいことだと思う。」という記述をしていた。グループでのふりかえりでも、「みんなで協力したから成功できた。」と発言しており、活動に対する達成感や満足感を感じるとともに、協力することの大切さや仲間の大切さにも気づいた様子だった。キャンプ初日の様子を思い返すと、これまでの様々な活動を通じて仲間と関わるのが、児童Aを大きく変化させたことがわかる。キャンプ最終日は、閉会式で自分が学んだことやできるようになったこと、またそれを今後の生活にどう役立てていくかについて発表した。児童Aは前日の準備の段階から、「原稿を全部頭に入れ、見ないで発表する。」と強い気持ちをもって発表練習をしていた。本番ギリギリまで練習をし、本番では一度も原稿を見ず、堂々とした立派な態度で発表を終えることができた。その姿から、児童Aにとって仲間と過ごしたこの7泊8日のキャンプは、充実したかけがえのない経験となったことを強く感じる事ができた。



(2) 当所実施のふりかえりシートからみる参加者の変容

※グループ・個人の変容について、ふりかえりシートをもとにしてまとめ、考察を行った。

① ふりかえりシートについて

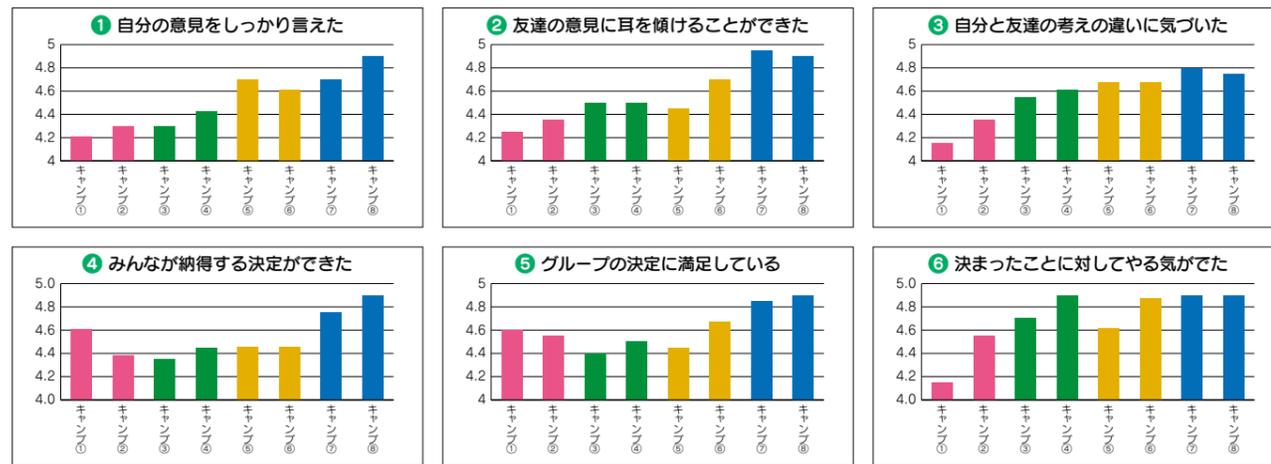
【ファースト】 ねらい：新しい仲間とともに協力して活動に取り組もう。	
◎個人としてのふりかえりの仕方を知ろう。	◎8月10日の主な活動 ・あかぎアドベンチャープログラム ・レクリエーション ・野外炊事【カレーライス作り】
◎今日の活動をふりかえって ①自分の意見をしっかりと言えた (5・4・3・2・1) ②友達の意見に耳を傾けることができた (5・4・3・2・1) ③自分と友達の考えの違いに気づいた (5・4・3・2・1) ④みんなが納得する決定ができた (5・4・3・2・1) ⑤グループの決定に満足している (5・4・3・2・1) ⑥決まったことに対してやる気ができた (5・4・3・2・1)	◎今日の活動をふりかえって ①自分の意見をしっかりと言えた (5・4・3・2・1) ②友達の意見に耳を傾けることができた (5・4・3・2・1) ③自分と友達の考えの違いに気づいた (5・4・3・2・1) ④みんなが納得する決定ができた (5・4・3・2・1) ⑤グループの決定に満足している (5・4・3・2・1) ⑥決まったことに対してやる気ができた (5・4・3・2・1)
◎明日の活動で生かしたいこと、感想など	◎明日の活動で生かしたいこと、感想など

本事業では「ふりかえりの充実」を、子供たちの成長を支えるための大切な支援方法の一つとして捉え、取り組んできた。キャンプの行程を「ファースト」【出会い】、「セカンド」【獲得】、「サード」【挑戦・成長】、「ファイナル」【旅立ち】の4つのステージに分け、ステージ毎にねらいを設定し、一日の最後にチームMTの時間の中で「ふりかえり」を行った。ふりかえりの方法としては、グループになり、活動についての反省や感想等を伝え合い、その後、左のふりかえりシートを活用し、個人でのふりかえりを行った。

個人のふりかえりについては、一つ一つの項目について、他者との比較の上での評価になりがちなため、シートの目的として、自分の成長を感じてもらうためのものであることを繰り返し説明し、記入をさせた。

(※1～5段階の自己評価で、最大値は5)

② 参加者全体の変容



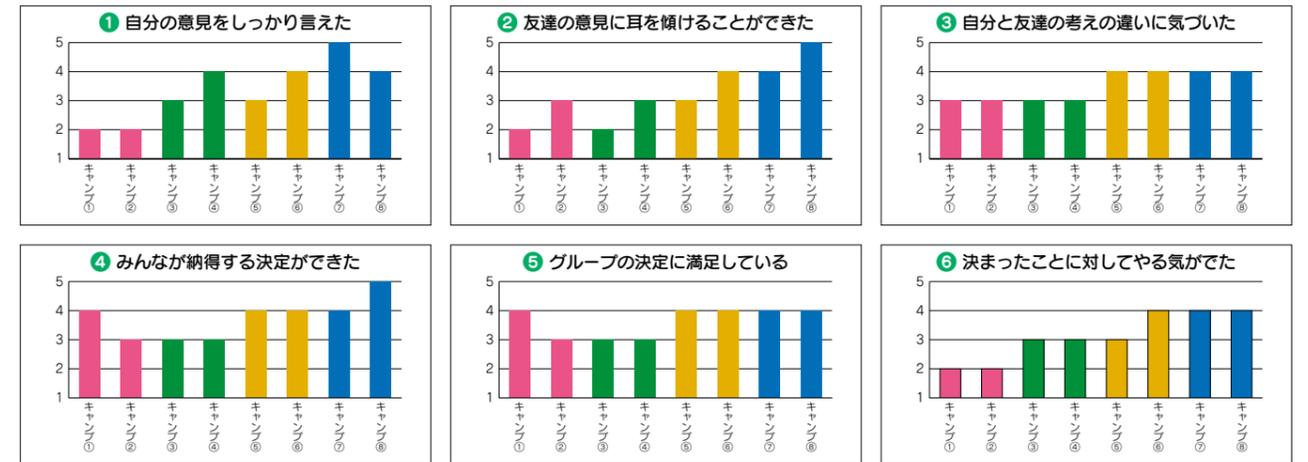
【考察】

- ・項目①②において、数値の大きな向上が見られる。項目①については、チームMTの時間を毎日確保し、継続して取り組んだことで参加者一人一人の伝える力が向上し、自信をもって自分の考えや意見を発言することができるようになったことが要因と考えられる。項目②については、ふりかえりの中に「みんなが話をしっかりと聞いてくれて話しやすかった。」「うなずいて聞いてくれて嬉しかった。」等の記述があり、自分の意見を受け入れてもらうことや認めてもらうことの喜びを繰り返し体験することで、友達の考えや意見にしっかりと耳を傾けようとする意識が高まったと推察される。
- ・項目③においては、協働的な自然体験活動プログラムへの取組や話し合いを通じて他者との関わりが深まることで、多様な考えや思いに触れる機会が増え、自分と他者の考えの違いに気づくことへと繋がったと考えられる。また、項目②とも関連し、他者の意見を聞くことの意識の高まりにより、ただ聞くのではなく、自分の意見との相違点を考えながら聞くことができるようになり、数値が向上したと考えられる。
- ・項目④⑤において、数値が初日に降徐々に下がり、中盤から後半にかけて高まっていくという同様の変化がみられる。下がった要因としては、チームMTで繰り返し話し合いを行う中で、伝える力の高まりとともに多様な意見が出るようになり、自分の意見が通らないという場面がでてきたことが考えられる。中盤から後半にかけて高まった要因としては、他者の考えを受け入れたり尊重したりすることができるよう、必要に応じてスタッフが介入することで、グループ内の意見や考えを幅広く採用される雰囲気や各グループに生まれ、納得感や満足感の向上につながったのだと考えられる。
- ・項目⑥において、自分の意見とは異なった決定事項に対しても、前向きにしっかりと取り組むという協調性の高まりが数値の向上に繋がったと考えられる。協調性の高まりの要因として、キャンプ前半には折り合いがつかず決定までに時間を要する様子が散見されたが、自分の意見が通ると次の機会には他の参加者に譲る等のお互いに配慮した決定の仕方が日を追うごとにできるようになり、グループの決定事項を尊重しようとする雰囲気が醸成されていったことが考えられる。

③ 個人の変容

対象児童A (小学生・男子)

○自己評価



【考察】

- ・項目①は、ファーストステージでは低い数値となっているが、他の参加者の発言を参考にしながら、ふりかえりに繰り返し取り組むことで少しずつ自信をつけ、自分の考えを発言することができるようになったと考える。また、同じグループの児童Bの存在が大きかったようで、児童Bが話し合いの場に来てくれるということが安心感に繋がり、落ち着いて自分の発言をするようになったと考えられる。
- ・項目②は、数値からもわかるように、自分の発言が終わると集中が切れてしまい、他の参加者の発言に耳を傾けることはできていないことが多かった。活動を通して、自分の発言をしっかりと聞いてもらうことの楽しさを体験することで、他の参加者の発言に対して、耳を傾けることが少しずつできるようになったと考える。
- ・項目③は、②の数値が向上してきたことで、多様な意見にしっかりと耳を傾け、自身の意見との違いに気付くことができるようになったと考えられる。
- ・項目④⑤においては、グループと同様の数値変化がみられる。自分の意見が通らないという場面がでてきたことが考えられる。中盤から後半にかけて高まった要因としては、他者の考えを受け入れたり尊重したりすることができる協調性の高まりが考えられる。

○自由記述 (一部抜粋)

1日目	初日を終えて、このキャンプがどういものなのか少しわかった気がする。アイスブレイクで少し緊張がほぐれた。
2日目	今日は野外炊事があって火を起こしたり、野菜を洗ったりたくさん仕事があって色々大変だったけど、一生懸命頑張った分、カレーがすごく美味しく感じた。
3日目	館内フォトラリーで、見つげずらいところにある物を見つけるのが楽しかった。自分のグループが最下位になってしまったのは悔しかった。部屋で騒ぎすぎてしまったので、明日からは気を付けようと思った。ふりかえりで自分の考えをしっかりと言えた。
4日目	登山で途中転んでしまったり、色々なことがあったけど、みんなで声を掛け合って山頂についた時は、とても嬉しかった。〇〇とボードゲームをやった時にトラブルになって嫌な気分になってしまった。
5日目	カッターを体験してみたことは、みんなで力を合わせないと前に進まないし、一緒に組んでいるペアで、二人のうちどちらかが勝手なことをするとケガをしてしまう危険があるということがわかった。少し言い合いになってしまうこともあった。だから明日の登山でも力を合わせて、みんなで登りきることができるよう頑張りたい。
6日目	黒檜山という山に登ってみて、地藏岳と違って手を使わないと登れないところがたくさんあっておもしろかった。みんなで協力したから登りきれたと思う。
7日目	メニューや作り方もないのに、自分たちだけで食材を選んで、作って美味しく食べられたのはかなりすごいことなのかもと思った。今日は火をつけるのにとても苦労した。
8日目	あっという間に7泊8日が過ぎていった。とても楽しく過ごせた。

【考察】

- ・児童Aのふりかえりには、キャンプ序盤は自身の事についての記述がほとんどであったが、中盤からは他者との関わりの中で感じたものや起きたトラブル等についての記述も見られるようになった。また、日を追うごとに、「声を掛け合って」、「みんなで」、「協力」等の言葉が随所に見られるようになり、様々な活動を通して他者との関わりが深まり、自分事だけではなく他者を意識することができるようになったことが窺える。

○保護者アンケートより

- 学校生活に関わる変容→体育委員に所属し、体育委員会主催のイベントや企画では、自分から積極的に意見が言えるようにしたいという目標を掲げているようです。
- 家庭生活に関する変容→家庭内で、身の回りのことに対して、声掛けをする自分事として動く姿勢が以前に比べ感じることができるようになったと思います。
- その他→長期間、親元を離れて集団で生活や活動をした経験は本人の中で確実に成功体験になっているようです。このキャンプは、子供の人生において無限大につながる貴重な体験になっていると思います。

(3) 慶應義塾大学医学部・国立赤城青少年交流の家・株式会社坪田ラボ・近視予防フォーラムとの共同研究

慶應義塾大学医学部 眼科学教室 特任助教 小川 護

【研究課題】

屋外活動の眼への影響の調査

【研究の目的】

約1週間の屋外活動前後で屈折値・眼のバイオメトリーデータ・ドライアイ・アレルギー性結膜炎などを評価・比較することが本研究の目的である。

【研究の概要】

国立青少年教育振興機構から慶應義塾大学医学部眼科学教室・株式会社坪田ラボに対して屋外活動と眼に関する調査依頼があり、国立赤城青少年交流の家にて毎年実施されている子供を対象とした屋外活動中心のプログラムにおいて共同研究を実施することとなった。検査測定では屈折値（近視や遠視の程度）や、眼軸長（目の長さ）など眼のバイオメトリーデータを測定し、近視に関連すると考えられている環境因子についても質問票で評価している。初年度は、令和3年度の国立赤城青少年交流の家の事業計画としての限界突破キャンプ参加者である17名を対象に、キャンプ前後で上記内容の探索的研究を行い比較した。令和4年度はあかぎ無限大キャンプとして24名が参加し、近視予防フォーラムが共同研究に加わった。プログラムの効果を評価する目的でプログラム約1ヶ月前に行われる事前キャンプ及び約1ヶ月後に行われる事後キャンプでも参加者に同様の測定を行った。コロナウイルスの影響にて本キャンプ施行直後は測定が中止となったが令和5年度は24名が計画通り4回（事前、本キャンプ前後、事後）を行った。令和6年度は昨年までの結果を踏まえ23名の参加者を対象に3回（本キャンプ前後、事後）の測定を行った。令和7年度は19名の参加者を対象に3回（本キャンプ初日、2日目、最終日前日）の測定を行った。

【検査日時】 国立赤城青少年交流の家にて計2回

国立赤城青少年交流の家

1. 8月10日（日）13:30-15:00 本キャンプ：8月10日（日）～17日（日）
2. 8月11日（月）13:30-15:00
3. 8月16日（土）13:30-15:00

検査者：慶應義塾大学病院眼科視能訓練士3名、眼科医1名

【検査内容】

近視の状態と近視関連因子（ドライアイ・アレルギー性結膜炎など）の変化

1) 主要評価項目

検査機器を用いた眼球パラメーター（涙液、屈折値、収差、瞳孔径、眼軸長、水晶体厚、脈絡膜厚など）の変化量（1週間のプログラム参加前後での比較）

2) 副次的評価項目

ドライアイ（シルマーテスト及びストリップメニスコメトリー）、アレルギー性結膜炎の変化（質問表）

3) 探索的評価項目

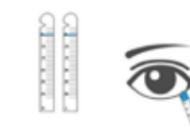
近業の際の眼から対象物までの距離、屋外活動時間、近業時間、睡眠時間、両親の近視、眼鏡装用者の眼鏡の種類などのアンケート項目（質問表）

機器を使う検査



1. IOL master 1-2分
眼軸長=眼の長さ
2. iTrace 1-2分
屈折値=近視や乱視の程度
3. OCT 2-3分
脈絡膜厚=眼の周りの厚み

試薬を使う検査



4. ストリップメニスコメトリー
涙の貯留量 15秒
5. シルマーテスト
涙の分泌量 5分

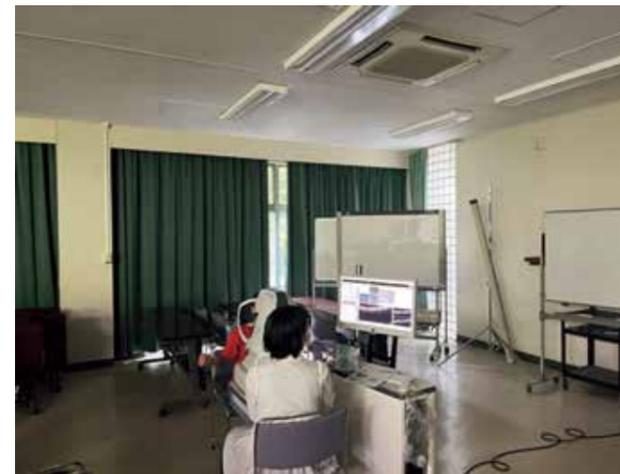
【参加者】

2025年度は19名

【結果】

1週間の集中的な屋外活動は子供の脈絡膜を厚くしたことが昨年までの結果より示されているが、今年度は近視自体も減少傾向が認められた。さらに、本年は参加者の涙を採取しアレルギー性結膜炎の有無や含まれる脂質成分を解析したところ、アレルギーや近視を持つ児童の涙はアレルギーや近視がない児童に比べて脂肪酸ヒドロキシル化脂肪酸という特定の脂の量が有意に少ないことが分かった。

眼科検査



【展望】

屋外活動の眼に対するポジティブな影響が明らかになりつつあるが、涙に含まれる脂質と近視やアレルギーとの関係については不明な点が多い。今回、涙の解析から脂質と近視の関係が新たに発見され、診断や治療につながることを期待される。また、屋外活動が元来の生活習慣や眼を含めた身体の状態などが影響するのかを検証を進めるため今後は参加者を増やし大規模及び全国的な調査が望まれる。屋外活動・キャンプ活動の重要性や効果持続期間のさらなる精査を進めていく。

(1) 成果

○参加者満足度

満足：19人(95%) やや満足：1人(5%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

○参加者アンケート・保護者アンケートや参加者実態から見る成果

- ①キャンプ全体を4つのステージに分け、ステージ毎にねらいを設定することで、参加者が提供されたプログラムに単に参加するのではなく、目指すべきねらいを意識してプログラムに取り組むことができた。
- ②野外炊事の役割分担やレクリエーションの内容等について皆で話し合い、合意形成を図りながら決定していくことで、一人一人が満足感や納得感を得ながら活動することができ、能動的に取り組むことができた。
- ③他の青少年教育施設と連携することで、より幅広い協働的な体験活動を実施することが可能となり、参加者にとって魅力的な体験プログラムを提供することができ、満足度の高さに繋がったと考えられる。
- ④閉会式で仲間や保護者に向けて決意表明をすることで、キャンプを通して自分は何を学び、何ができるようになったのかが明確となり、それを今後の学校生活や家庭生活に活かしていこうとする意欲付けに繋がったと考えられる。
- ⑤キャンプ実施1か月後の保護者アンケートにおいて、「頼まなくても手伝いをしてくれるようになった。」「実行委員に初めて立候補した。」「困ったことを自分から相談するようになった。」等の記述が多く見られ、本事業での経験が参加者の主体的な活動に繋がっていると考えられる。

○本キャンプの趣旨に対する成果

(1) 長期自然体験活動において、協働的な体験プログラム(野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等)を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。

- ①キャンプ当初は個々で活動をする参加者の様子が見られたが、活動を通じて交流を深めることで、グループ内で互いに声を掛け合い、気遣いながら協力して活動する様子が多く見られるようになった。登山中には、他のメンバーに励ましの声をかけたり、活動前の話し合いでは、自分の意見が通ったら次回は他の人に譲ったりするなど、自分だけではなく他の参加者を尊重する様子が随所に見られるようになった。
- ②チームMTやグループでのふりかえりにおいて話し合いを繰り返すことで、参加者一人一人の伝える力、聞く力が向上するとともに、他者の考えや思いを尊重したり受け入れたりすることができるようになり、多数派の意見や少数派の意見にも耳を傾け、自分とは違う多様な意見に対しても、大切にしながら決定することができるようになった。キャンプ中盤あたりからは自分達だけで話し合いを進め、次の日の活動に活かしていこうとする姿が見られた。
- ③ふりかえりの仕方について、スタッフとボランティアで十分に共通理解を図って臨むことで、充実したふりかえりを行うことができた。他の参加者のふりかえりを聞くことを通して、取り組む活動が同じでも、人それぞれ多様な考え方や感じ方があることに気付く良い機会となっていた。

(2) 課題

○プログラムについて

- ①今キャンプで「あかぎ無限大キャンプ」は最終年を迎え、一区切りとなった。プログラム内容の教育的効果について様々な視点から検証をし、より効果的な長期自然体験活動となるよう企画・運営をしていく。
- ②ボランティア研修キャンプについて、扱う必要のある研修内容を考えると一泊二日では短く、泊数を含め、研修内容の再考が必要であると感じた。

○参加者の安全確保・健康維持について

- ①活動時における熱中症対策について、体制として万全であったか、職員、ボランティア、講師による様々な視点で検証し、今後はさらに対応を強化していかなければいけないと感じた。休憩・給水のタイミング、空調のきいた場所の確保以外にも、細やかな給水や休憩時間を積極的に設ける必要がある。
- ②登山については、様々な事態を考慮して、ルート上の危険ポイント、天候急変等によるルート変更、緊急対応時のスタッフの動き等についてより詳細に打ち合わせを行い、周知徹底をする必要がある。
- ③危険を伴う活動等で、不測の事態が起きた場合を想定すると、スタッフの増員や救護専門のスタッフの配置について考える必要がある。

(3) 小川先生より(研究内容・結果等)

子供達の成長を目の前で見れるあかぎ無限大キャンプ

慶應義塾大学医学部 眼科学教室 特任助教 小川 護 氏

本年度は国立赤城青少年交流の家における眼科検診が5回目となり、キャンプの開始直後と2日目、終了前に目に関する測定・アンケートを行わせていただきました。以前は新型コロナウイルスの影響もありましたが、今年もキャンプが無事行われ、目の測定は計3回無事に終わることができました。簡単ではない検査もある中で、短時間の中で手順を理解しご協力くださり、円滑に進めることができご協力を誠に感謝申し上げます。不慣れで不安もある検査の中でも、興味を持ってくれたり、周りのお友達が検査に協力してくれたり、昨年までに参加したことのある児童が内容を丁寧に説明してくれて、乗り気でなかった参加者の不安が解消され子供が検査を行うことができた場面が何度かありました。研究や医療もチームワークとコミュニケーションが最も重要です。優しい気持ちや挑戦する姿勢がキャンプ中にも養われていったことと思います。今回、初めて涙の回収と小型細隙灯顕微鏡による画像撮影を行いました。研究の世界も日々新しい機械や技術が登場し、微量である涙からアレルギー成分や脂質の同定・定量に成功しました。あかぎ無限大キャンプから世界に先駆けた発見が期待されます。

多彩な経験が本プログラムの魅力だと思います。3年前に私も家族で長七郎山に登頂し、赤城山の豊かな自然の中で過ごす素晴らしさを実感いたしました。今年は実際に初日に宿泊しキャンプに参加させていただくことでよりキャンプの内容や参加者の視点で検診を理解することができました。実際に参加者の性格や高度動機は素晴らしく、今後の活躍が期待されます。リーダーになれる素質を持った子どもが多いと感じました。近視の児童は著しい勢いで増加しており、この赤城の家における研究により屋外活動・キャンプ生活の重要性を明らかになってきております。新型コロナウイルスの影響で増えてしまった屋内時間やデジタルデバイス使用時間の増加は近視進行に影響していると考えられ、それを防御する治療や日常生活が期待されています。キャンプを通じた屋外活動の目や体への効果を科学的に検証し、子どもたちの身体発育・健康増進の手助けになれるよう頑張ってください。参加者・保護者の皆様の研究に対するご理解に改めて感謝いたします。



『無限大キャンプ』4年間の取組みについて

※4年間のふりかえりとして、歴代の無限大キャンプ担当とともに座談会を実施しました。(2025 / 12 / 24)



参加者

- 桑山 宗大 (国立赤城青少年交流の家所長)
- 小林 大輔 (2022年度主担当/埼玉県教育局 教育総務部生涯学習推進課 社会教育施設企画調整担当社会教育主事)
- 中山 太平 (2023年度主担当/足利市立毛野南小学校 教諭)
- 平澤 輝樹 (2024年度主担当/国立赤城青少年交流の家 主任企画指導専門職)
- 酒井 亮介 (2025年度主担当/国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職)

○各年度プログラムの編成について

【進行】 まず初めに、それぞれ担当されたキャンプのプログラム構成についてお話しいただければと思います。その際、どのような思いや考えで企画・運営されたのか、また、参加した子供たちの様子等にも触れながらお話しいただければと思います。

【小林】 私は、限界突破キャンプ最後の年を副担当として参加し、次の年に無限大キャンプ初年度の主担当となりました。限界突破キャンプというのは、上毛三山を全て制覇するというどちらかというと体力自慢が集まるような形の体力重視の企画でした。それで新しい企画を考えようというときに世間では多様性ですとか、ウェルビーイングですとか、そういった言葉が目されるような変化の時期を迎える時代だったので、そこに目をつけて目指す子供像を設定しました。プログラム構成をするにあたりゆとりのあるプログラムや選択できるプログラムを軸にして、特に気をつけたところは、グループでの話し合い活動やミーティングを活発に取り入れ、子供たちがたくさん意見を言い合っ、互いに折り合いをつけながら活動できるようにしていきま。また、私個人として、この国立赤城青少年交流の家というフィールド、赤城山というフィールドはとても素晴らしいと思っており、ですので、このフィールドや赤城のプログラムを余すことなく使いたいという思いがあり、遠征登山や選択登山とかあったんですけども、基本的には国立赤城のフィールドの中で活動することを多く取り入れました。



【中山】 大きなねらい、趣旨等については引き継ぎつつ、ブラッシュアップするというかたちでプログラム、ステージの構成を考えました。特にステージについては、5ステージから4ステージに変えることで、子供がステージ毎のねらいを意識して取り組めるようなステージ構成にしてみました。それからプログラムの面で言うと、チームとしての絆であったり、メンバーの良さであったり、個性であったりというところをより深く知るためにチーム登山を計画しました。当日は悪天候のため、コース変更をしての実施となりましたが、ねらいは達成できたと思います。チームから個に戻すということ、自分の能力や、希望を優先させて登りたい山を決めるという選択登山も実施しました。メンバーで助け合うような姿も多く見られたので、大まかなねらいは達成できたんじゃないかなと思います。参加者については、1年目に5年生で参加した子が6年生になってもう一度参加するっていう子たちも何人か見られました。また、課題をかかえるお子さんも多く参加されましたが、グループ活動で折り合いをつけられるような姿が、キャンプ終盤にはたくさん見られるようになったので、協働的な体験プログラムを通して多様性を認め合うということに関しては、趣旨に近づけたようなキャンプになったのかなと思います。



【平澤】 私は、先輩方に1年目、2年目で取り組んでいただいたもののまとめとなるようなキャンプにしたいと思い、計画しました。1、2年目のキャンプの課題として「話し合うこと」の意味がある

といいではないかということが挙がっていたので、その話し合ったものが次の日のプログラムに繋がるような形を意識して作りしました。例えば最初にクラフトで作ったスプーンでカレーを食べる等の、先を見越して話し合いができるような形っていうのを意識してプログラムを作らせていただいたという形です。あとは選択登山として、自分達で選択できるような機会を多く設定することで1年目、2年目でやってきたことがまとまるようなキャンプを目指したつもりです。リピーターや兄弟での参加が多く見られ、人気のキャンプなんだなというのを感じました。最初から話し合うことや、多様性を認め合うっていうのを目的にしているので、最初のうちはなかなか自分の意見が言えなかった子も徐々に言えるようになって、最後は「すごく楽しかった!」と言ってくれる子たちが多かったのが特徴かなと思います。



【酒井】 私は、諸先輩方が3年間かけて取り組んでいただいたものをベースとしつつ、その中で何か変化をというところを意識し、プログラム作成を行いました。具体的には4点です。まず1点目が所外との連携です。山頂にある前橋市赤城少年自然の家と連携したプログラムの内容を考えてみました。特に、国立赤城ではできない体験としてカッター体験ですとか、クラフト体験、生活のきまりについても違いがあったりするので、その辺も子供たちにとってはすごく新鮮だったようです。この国立赤城を拠点に活動していく良さもあると思いますが、少し環境を変えてあげるっていうだけ子供たちにとってはいい刺激になってたようです。リピーターの子供も多かったんで、同じ活動ばかりだと、慣れが出てしまったりとか、興味関心という点で薄くなってしまふかなと思うので、いい意味での刺激って必要なんで、改めて感じました。2点目が野外炊事です。今年度のキャンプでは3度野外炊事を実施しましたが、特に3回目については「ピクニック野外炊事」という形で実施しました。様々な食材をこしらえて用意し、子供たちがその食材を見て何を作るかを話し合うという形です。活動前には不安もありましたが、どのグループもオリジナリティーあふれるメニューを考えて楽しんで活動していました。3点目はスタッフの関わり方です。プログラムデザインの中のスタッフの関わり方という項目について見直し、より詳細に明記をしました。これについて職員とボランティアで共通理解を図り、常に意識することで良い距離感を保ち接することができたと思います。4点目が「話し合い」の充実です。なんとなく丸くなり、なんとなく感想が言えてそれでOKというのではなく、話し合いなので話したことに対してリアクションがあり、欲を言えばもう1ターンぐらいあって初めて話し合うことなのではと考えました。職員やボランティアが入らずとも自分達でそれぐらいの話し合いができることが目標だということを、キャンプ初日に子供達に示しました。繰り返し取り組むことで、スタッフやボランティアの力をかりず自分達だけで、明日の活動に活かせるような意味のある話し合



ができるようになったと思います。以上の4点が、変化として挙げられるものとなります。

【小林】 話し合いについてですが、正直話し合わなくても達成できてしまうプログラムもあります。そういった活動ばかりだと子供達は真剣に話し合わないし、意味のない活動となってしまいます。それを考えるとピクニック野外炊事はまさに話し合い、力を合わせないとできない活動です。自由度が高く、必要のある話し合いを意図的に仕組むことのできる素晴らしい活動だと思います。

【所長】 先程、自由度の高い活動プログラムという話ができました。ご自分の担当したキャンプを今振り返ってみて、こういう活動を入れたらよかったなというものがあったら教えてください。



【中山】 1年目のキャンプの時に、1日フリーの日を設け、子供達がプログラムを選び、取り組む内容を考えるという活動をさせていて、素晴らしい取組だなと思いました。用意されたものからプログラムを選択するだけではなく、もっと子供達に話し合わせ、決定させていくことで自由度が高まり、さらに良いのかなと思います。また、所外にも少し出る機会があってもよかったのかなと感じています。例えば、ルート選択が可能であれば自分たちの行きたいところに行けるし、見たいものが見られる。活動の幅がかなり広がるのかなと思います。

【小林】 あとはルール上難しいところもあるとは思いますが、例えば食材を外に買いに行くとか、最後のお別れパーティーで各グループが計画したゲームをするための材料を買いに行くとかそういうのができれば、子供達の自主性を大切にしつつ、みんなで盛り上がるようなことができるのではないかなと思います。

【所長】 プログラムの中に選択登山がりましたが、どのような意図があったのか教えてください。

【小林】 推進委員会でご指導をいただきながら、私は2回登山を実施しました。全体から個に戻すということをイメージし、1回目は地蔵・長七郎コースを全員で登り、赤城山について理解を深め、2回目は自分で登る山を選択するかたちで行いました。

【平澤】 私は、「自分と向き合う」ことを大切なものの一つとしてやってるところもあって、そこまでのグループタイムで徐々に関係ができていて、最終的には自分の生活圏に戻っていったときに生かすために、1回自分と向き合い挑戦のレベルをあげていきました。それがきつなくても、自分で山に挑戦し、最後まで諦めないとかやり抜く力をつけるということを大切にしました。

○今後の長期キャンプに期待すること

【進行】 今後の赤城の長期キャンプに期待すること、アドバイス、熱いメッセージ等をお願いします。

【小林】 私からは2点お伝えしたいと思います。まず1点目は、持続可能なキャンプにしてもらいたいということ。参加者がいて、その参加者がボランティアとして帰ってきて、ボランティアの子供が親になってその子供が参加してくれるようなサイクルがあれば一番理想かなと思います。そのためにはまず、国立赤城で長期キャンプを実施していることを実際のどのぐらい認知されているのかということが大切かなと思います。認知度を上げるには、積極的な広報しかないかなと考えています。赤城フェスタ(地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業)はとても良い機会だと思っていて、ブースで、その年の成果物を掲示するなどやっていることを積極的に発信するのも良いと思います。2点目は、この報告書についてです。県立、私立の施設、そして民間の施設色々ありますけれども、本当に参考にさせてもらっています。ですので、他施設の方の参考になるような素晴らしいものを作り続けてほしいなと思っています。例えば、

現代的な教育課題に対応しているようなプログラムであったり、地域人材とかを活かしているようなプログラムであったり国立施設で行っているものをそのまま施設で実施することは難しいかもしれないけど、その中のエッセンスを取り入れられるような参考となるような長期キャンプになってほしいなと思っています。さらに、職員の体制、運営の方法などの詳細についても報告書の中で見える化していただくと、参考になるのではないかなと思います。

【中山】 3年振りに学校教育の現場に戻ってすけれども、この社会教育で、しかも国立の社会教育施設で実施しているこのキャンプの凄さというか、どうしてもやはり学校教育では絶対できないだろうなというのを強く感じます。ここで経験したことを、それぞれが自分の生活の主体である学校に持ち帰ることができているっていうのは本当に多いと思います。この社会教育で、国立でしかできないようなキャンプをこれからもぜひ継続していただきたいです。そうすることで、学校教育としてもすごくプラスになる部分が多いんじゃないかなというふうに思います。私も実際ここに動かせていただくまでは、本当に自然体験とは無縁な人間でした。この国立赤城に来て、実際に自然体験をした子供達の様子を見てみると、苦労の先にある達成感だったり、そういったものを味わって成長する姿を多く見ることができました。この長期キャンプで自然体験活動を中心とした内容のキャンプを企画していくことが、これから先さらに情報化社会になっていく状況を見ると、より重要になるのではないかなと強く思いました。

【平澤】 今お二人がおっしゃっていただいたことが最もだなと思いました。新しいキャンプを考えていくにあたって、この部分は無限大キャンプでの積み重ねが生かされているなとわかるようなところが少しでもあると良いのではないかなと思います。先程、話にも出ていた、参加者がボランティアとして帰ってきて、ボランティアの子達が親になってその子供が参加してくれた時に、「無限大キャンプでやってたものだ!」とそんな風に感じてもらえるような場面があったら素敵なことだなというふうに思いました。

【酒井】 今いただいたお話を念頭に、来年度、より良い新しいものを考えていくことができたらなというふうに改めて感じました。やはり続けることってとても大事なことで、無限大キャンプが良いものとして成果を挙げられたのは、間違いなく限界突破からの良い流れがあると思いますし、これから新しいものをつくっていくときにも、やはり無限大からの流れを受けてとかっていうかたちになるのかなと思っています。それが赤城の良い伝統になればいいなというふうに考えています。名前は変わりますがけれども、取り組みの中に、今までのものが蓄積されていくような形でできていくとすごく良いものができるのかなというふうに思います。今後目指すものも変わっていきますし、子供達も変わっていきます。どうしたら目標とするような子供達にできるかを考えながらなら、新しいものを考えていきたいと思えます。様々な事を自分なりに勉強しつつ、どういものが子供達にとって魅力あるものなのかというのを考えながら企画していけるというものが作れていくのかななというふうに思います。来年度、頑張ってください。

【所長】 本日は、お忙しい中お話しいただきありがとうございました。主担当が4人集まるというのはなかなかできることではありませ。今年度も、代々繋いでいただいていた思いを無事に進めることができました。やはりこの成果を次のキャンプに繋げていくのが私の使命だろうし、また、国立施設としてこれらをどうやって意義付けしながら子供達の体験活動に繋げていっていかうことが重要だと思っています。機構の予算もなかなか厳しい中ではあるんですけども、7泊8日程度の長期キャンプというのは来年度もやっていきたいという思いを持っていますので、皆さんが温めて繋いでくださった内容を現代教育課題に合わせてやっていきたいと考えています。今日は来年に向け、貴重な示唆をたくさんいただくことができ、今日の座談会は、有意義な時間になったなというふうに思っております。本当に貴重な時間ありがとうございました。必ず次に繋げてまいります。本日はどうもありがとうございました。

7 4年間の取組とその成果

※無限大キャンプでは、趣旨に迫るための効果的なプログラムを編成し、様々な活動に取り組んできた。4年間の取組を通して以下の4点が、今後の事業で生かすことができると考える、特に成果の上がった取組である。

(1) 4ステージ制を活用したプログラムデザイン

全行程を4つのステージに分け、その中で体験が次の学びに活かされるようにプログラムを編成し、参加者自身が成長を実感できるようにすることをポイントとした。

ステージは、「ファースト」【出会い】、「セカンド」【獲得】、「サード」【挑戦・成長】、「ファイナル」【旅立ち】とし、ステージ毎にねらいを設定することで、参加者が提供されたプログラムに対して単に参加するのではなく、目指すべきねらいを意識し、能動的に取り組むことができた。特に「野外炊事」や「登山」等の協動的な体験プログラムについては段階的に活動の内容や難易度を高め、参加者が意欲的に取り組めるようにした。そうすることで、知識や経験が蓄積され、多くの参加者が自身の成長を実感するとともに、自信をもって活動に取り組めるようになった。



(2) 継続的な「話し合い」

協動的な体験プログラムの実施前と実施後に、グループでの「話し合い」の時間を積極的に取り入れた。活動実施前には確認・打ち合わせ、役割分担、活動実施後にはふりかえりとして、話し合いの時間を繰り返しもつことで、「自分の考えを伝えることができる。」「友達の意見に傾聴できる。」「合意形成しながら、対話・決定・行動ができる。」力を高めることができた。

また、キャンプ前半にはなかなか折り合いがつかず、決定までに時間を要する様子が散見されたが、自分の意見が通ると次の機会には他の参加者に譲る等のお互いに配慮した決定の仕方が自然とできるようになった。自分本位ではなく、他の人の事も尊重し、皆で取り組んでいこうとする雰囲気醸成されていった。



(3) ふりかえりの充実

グループや個人の成長をよりよく促すためには、ふりかえりの充実が不可欠であるとする。そのため一日の活動の最後に、グループ・個人でのふりかえりの時間を毎日必ず設定した。また、ふりかえりが形骸化しないよう、初日に目的や方法について十分に説明をし、共通理解を図った。

グループでのふりかえりでは、「メモ等は作成せずに自分の言葉で相手を見て伝える」、「楽しかったや大変だったのみではなく、理由付けをする」ことをルールとし、一日の活動の中で感じたことや気づいたこと、めあてに対する自分の取組みはどうであったか等についてグループの中で交流をさせた。当初は、短い言葉で話すことが精一杯だったり、言葉に詰まったりする様子が多く見られたが、繰り返し取り組むことで、スタッフが介入しなくてもお互いで考えを交流することができるまでに成長した。個人のふりかえりではシートを活用し、自由記述欄だけでなく自分の活動を数値で自己評価する欄を設けることで、日々の変容を自身で感じることができるようになった。



(4) スタッフの支援について

プログラムデザインの中に、ステージ毎のスタッフの関わり方を明示した。活動中において即座に中止させるべき危険な行動を除いては、介入をするのではなく、極力個人やグループに主体性をもたせて解決を目指すということを基本的な考え方とし、スタッフ全体で共有した。

子供たちにもスタッフ側のスタンスを伝えることで、ステージを迫る毎に、スタッフに頼るのではなく、自分達で考え、活動しようとする姿が多く見られるようになった。

子供同士でトラブルに発展した場合についても、スタッフが静止してしまうのではなく、お互いの考えや発言を大切にしながら話し合いで解決することを促し、必要な介入を除いては、見守ることを心掛けた。

スタッフの介入が必要な場面と子供達の自主性に任せる場面の見極めについては、最初は判断に迷うような様子も見られたが、活動する中で子供たちとの関わり方を試行錯誤することで、自然に感覚として身に付け、良い距離感を保ちながら接することができるようになり、スタッフも成長することができた。



(5) おわりに

国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 酒井 亮介

今年度の「あかぎ無限大キャンパーファイナル」は、令和4年から取り組んできたこれまでの4年間の集大成と位置づけ、協動的な自然体験プログラムを通して、多様性を認め合える意識の醸成を図ることを趣旨として実施しました。

行程を4つのステージに分けて各ステージのねらいを明確にし、系統的・計画的にプログラムを実施することで、知識や経験が蓄積され、参加者自身が成長を感じながら活動に取り組むことができ、高い効果を得ることができました。また、活動実施前後やふりかえりの時間等に、話し合う場面を多く設けることで、合意形成を図りながら対話・決定・行動する力を高めることができました。

今年度も、過去のキャンプによって得られた成果や課題、先輩スタッフが築き上げてきたものを継承しつつ、関係各所や保護者、本所スタッフに支えられ、充実した事業にすることができました。子供たちのやり遂げることができた時に見せた笑顔、仲間を思いやる姿、グループで話し合っただけで決めたことを頑張りぬく姿がキャンプ中の随所で見ることができ、この長期キャンプが子供たちにとって貴重な時間となったと感じ取ることができました。

今後は、この4年間の取組で得られた知見を生かし、参加者にとってさらに魅力溢れる長期キャンプを企画・運営していきたいと考えています。

過年度の報告書



令和4年度 事業報告書



令和5年度 事業報告書



令和6年度 事業報告書

後援：群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、埼玉県教育委員会、栃木県教育委員会、茨城県教育委員会
共同研究：慶應義塾大学医学部眼科学教室、株式会社坪田ラボ、近視予防フォーラム

令和7年度 国立赤城青少年交流の家職員

所長	桑山 宗大
次長(兼)総務係長	森原 強史
主任企画指導専門職	平澤 輝樹
企画指導専門職	酒井 亮介/山田 堯輝/金子 泰之
企画指導専門職付係員	平田 潤
事業推進係長心得	中谷 仁
事業推進係員	吉武 優香/伊藤 帆香/山田 翔太 寺田 里美/近藤美由紀/田中 功志/大崎 仁樹(~R7. 6. 30)
総務係長	逸見 博俊(~R7. 6. 30)
総務係委員	大崎紗也加
総務係員・看護士	鈴木 和子
管理係長	白石 崇尋
管理係員	小野 北斗/栗山 知大